新潮文庫

密謀

下巻

藤沢周平著

新潮社

密謀（下）

新潮文庫　ふ-11-13

昭和六十年九月十五日　印刷
昭和六十年九月二十五日　発行

著者　藤沢周平

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部（〇三）二六六—五一一一
編集部（〇三）二六六—五四四〇
振替東京四—八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊐　印刷・二光印刷株式会社　製本・株式会社植木製本所
© Shûhei Fujisawa 1982　Printed in Japan

ISBN4-10-124713-7 C0193

新潮文庫

密謀

下巻

藤沢周平著

目次

凍る月かげ……七
青竜・白虎……四六
ひとり舞台……八二
佐和山……一一八
暗闘……一四三
革籠ケ原……一八七
遠き関ケ原……二一六
冬の雲……二六二
解説　尾崎秀樹

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

密謀

下巻

凍る月かげ

一

「や、お待たせして相済まぬ」
兼続が待っている部屋に来ると、石田三成は坐りながらそう言い、唐金の手焙りに手をかざした。
すぐに石田の家臣が白湯と黍餅をはこんで来たので、兼続は家臣が去るまで口をつぐみながら、石田を見まもった。石田もそのつもりらしく、黙って火の上の手を押し揉んだ。
石田は背をまるめ、放心したような眼を部屋の隅に向けている。少し疲れているように見えた。家臣が出て行ったので、兼続は口をひらいた。
「お疲れではないのか？」
「いや」

石田は兼続を見た。首を振って微笑した。束の間の放心を見咎められたのをさとって、恥じているような顔色だった。

「なに、旅の疲れなどはどうということもないが、腕力だけで頭の固いわからず屋が多くて困る」

「……」

「いや、お呼びたてして済まなんだ」

石田はあらためて頭をさげた。

兼続は、景勝と一緒に十月七日に伏見に来たのだが、そのとき石田は九州博多に行っていて会えなかった。秀吉の遺言に、在鮮の将兵をつつがなく呼びもどせ、という一項があって、石田は浅野長政らと一緒に、全将兵の朝鮮引き揚げという大仕事を片づけに行ったのである。

戦地にいる将兵を無傷で引き揚げさせるには、配船から命令の徹底まで、卓抜した指揮能力が要求される。その大役をはたして来た男にしては、石田の顔に鬱屈のいろが濃かった。昨夜帰って、今日早速に兼続に使いをよこしたのも、単なる儀礼の意味ではなく、その鬱屈のせいかも知れなかった。

およその推察はついた。朝鮮陣で秀吉の目代をつとめた石田と前線の将たちの間には、石田の報告をめぐる古い確執があって、今度も引き揚げ地の博多でいざこざがあったことは聞いている。それについては、石田が帰る前に耳にしたこともあるが兼続はそのことは言わなかった。

「荒れておったろう」

とだけ言い、言葉を続けた。

「最後に泗川の大勝で面目を保ったとは言うものの、はやい話が、今度の戦は負け戦じゃからの。つのる不満を、後方で指揮をとる者にぶつけたがる気持はわからんでもない」

「しかし、指揮したのはわしではない」

石田は憤然と言ったが、そこではじめて気づいたように、少し酒を酌もうかと言った。石田は手を打って、これよ、誰かあると呼んだ。遠い場所で返事の声がした。

「一の戦にも、双手をあげて賛成したわけではない。日本六十余州があれば足りるのよ。気にいらなかったが、黙った。二の戦にはわしは異をとなえた。そのことは誰も言わぬ」

憤懣に堪えないように石田は言葉をつづけたが、家臣が来ると酒を命じ、そのまま口をつぐんで黍餅に手をのばした。

「知るひとぞ知る。それでよろしいではないか」

兼続は言ったが、石田は答えずに餅を嚙んだ。膝にこぼれ落ちた餅のかけらを、指でつまんで口に入れた。

酒を運んで来た家臣が、白湯と黍餅を持ち去ろうとしたが、石田はとめて餅を置いて行けと言った。家臣が持って来たのは、冷や酒と盃だけだった。餅を肴にするつもりだろう。

いつ来ても、伏見城内の石田屋敷のもてなしは質素だった。おれだからいいが、と兼続は思うことがある。ひとによっては誤解が生まれよう。

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

しかしそれが奇をてらっているのでも、まして費えに吝いのでもなく、石田三成という人物の紛れもない一面から来ていることが、兼続にはわかっている。

兼続は会津国替えで帰国するころ、一度だけ急用が出来て、折から佐和山の居城にもどっていた石田をたずねたことがある。佐和山城は、湖からさほど遠くない丘の上に、西ノ丸、二ノ丸、三ノ丸、さらに太鼓丸、鐘ノ丸、法華丸の城壁をつらね、その中に五層の天守閣がそびえる大城だった。

さすがは太閤の寵臣の城にふさわしい偉容だと眺めながら、兼続は案内の者にみちびかれて丘の上の城に入ったのだが、城中に通されて、そこでもう一度驚くことになった。城の中は、極端に飾りを廃した造りで、内装はほとんど貧しげでさえあった。壁などは、むき出しの粗壁だったのである。

そのとき兼続は、いささか石田三成という男を理解した、という気持になった。城は戦闘の用に立てばよい。石田は城本来の目的と機能を簡略にそう要約し、そのとおりのものを築いて、ほかのことにはさほど心を遣わなかったのだ、と思った。

佐和山の地は、北陸、濃尾の勢力が京に入るには、必ず通過しなければならない、いわば京の咽喉部ともいうべき重要の地である。信長はその場所に、宿将の丹羽長秀を置いた。秀吉は信頼厚い堀秀政を置いた。

石田はむろん、佐和山の土地のそういう戦略的な意味を十分に理解している。旧城に大修築を加えて、石田が佐和山城を人が眼をみはる大城に築き直したのは、旧領主関白秀次が没

落したあとだが、石田は城構えはもちろん、城の搦手にあたる湖畔一帯には重だった家臣の屋敷を置き、さらに松原の間には士卒の住居を配って、附近一帯を、要衝にふさわしく一大要害化したのであった。

城は戦闘の用に立てばよい、という考え方は、石田が万石の扶持をあたえて島左近、蒲生郷舎らを抱えたことにも通じる。家臣は有能である方がよい、そのためには扶持の多さは問うところではない、と石田は思っているのだろう。

要衝を守るに足る城があり、その城を守るに十分な有能な将士がいる。石田の関心はおそらくそこで終わるのだ。城の内装までは頭が回らない。というよりも、その余のことは無用と思うのだろう。

そういう心の動きようは、石田三成という男の気持の在り方に、ある欠落した部分があることを示すかも知れない、と兼続は思うことがある。その欠落した部分の行方はわかっている。

ある種のことに対する無関心は、すべて別のこと、つまり政治に対する強烈な関心に振りむけられて、多分奔流のように石田をそちらに運び去るのだ、と兼続は思っている。書を読み、詩もつくる兼続からみると、石田の政治好みは、一種の奇型の相を帯びてみえて来る。城の内壁をどう塗るかということは、石田の頭にはない。石田の興味はつねに、変転する政治の上にある。

秀吉の幕僚として、石田は茶も能も嗜んだはずだが、石田は主人の秀吉のように、そうした余技に淫することはなく、つねにさめていたろう。一服喫し終えれば、茶の味もすぐに忘

れたろうと思われるのだ。

――だが、そのかわりに……。

と兼続はひそかに思っている。

五奉行の筆頭は前田玄以で、席次からいえば石田は四番目である。だが政治的な眼識ということになれば、石田は五奉行の中でただ一人、文字どおり一頭地を抜いている。

石田はその意味では、死んだ秀吉の正統をつぐ者だった。天下の動きを見通す眼の確かさと政治的な策略を嫌わないという点では、宿老の前田利家を抜き、ゆうに家康に対抗出来る器量をそなえている、と兼続は石田を見ていた。

石田の政治的眼配りの確かさは、さっき石田が口にしたように、朝鮮陣の不成功をはやくから見通していた点にも現われている。

しかしその器量人石田は、現実には二十万石足らずの城持ちに過ぎず、また五奉行の一人として多少の地位と名は知られているものの、要するに豊臣政権の一吏僚でしかなかった。少なくとも、人は石田をその程度にしか見ない。また、言うこともきかなかった。

そういうことに石田はときに苛立ち、ときには必要以上にまわりに横柄な態度を示したりする。だが、石田のそういう態度そのものが、秀吉の権威を笠に着ていると見られがちだったのだ。石田の不評はそのあたりから出て来る。兼続は石田に、人に理解されない、鋭敏にすぎる政治的な才能を持つ男の、不運を感じることがある。

政治に対する関心だけが頭につまっていて、ほかのことはどこかに忘れて来たようにも見

えるその男は、家臣が去ると兼続に酒をつぎ、自分の盃にも酒を満たした。
そしてその盃をかかげて、兼続を見た。

二

「ま、いいわ」
石田は苦笑した。ひと息に盃をあけてから言った。
「人は人、われはわれじゃ。さまざまに言う者があっても、やむを得んだろうて」
「しかし、博多で採めた連中には、少し注意したほうがよかろうな」
と兼続は言った。石田は黙って酒をついでいる。
「じつは貴公が帰る前に、先に帰っていた連中の間に、若干不穏な動きがあったようだ」
「ふむ」
石田は盃を手にしたまま、じっと兼続を見た。
「福原、垣見、熊谷。つまりお手前の下で朝鮮陣で軍目付をつとめた人々を討ち取るべしという議論があってな。その集まりの席で、頭に血がのぼってか、いや石田を斬るのが先だと吠え立てたおひともいたそうだ」
「……」
「これは確かな話だ。用心されたがよい」
「バカがいよいよはじめたか」

と石田は言った。

石田はうす笑いして盃を干した。石田の笑顔には、どこかしぶとい感じが出ている。石田は才はじけた男だが、ひ弱い神経の持ち主ではなかった。内側には意外な剛気さと、容易には参らないしぶとさを隠している。

「連中は、われわれがことさらに故太閤さまに讒訴したようなことを言っておるが、なに、違うのだ。福原にしろ、わしにしろもっぱら正直のところを報告したに過ぎん」

「それは、わしにはわかっておる」

「連中の気持はわからんでもない。こっちはまともに敵とわたり合って、命を的に働いておる。そこをうしろから来て、手も汚さずに勝手なことをほざくな、というつもりだろうが、それは立場が違うからやむを得ん。立場が変われば、今度はこっちが刀を抜いて敵と斬りむすぶのだ。それだけのことに過ぎん」

「そういうことだの」

「それに、言いたくはないが、連中もけっこう手柄を飾るぞ」

石田はそう言ったが、自分の言葉に嫌気がさしたらしく、顔をしかめた。手酌で乱暴に酒を口に運び、つまらんことを言った、いまのことは忘れてくれとつぶやいた。

石田は、酒器を持ち、飲めという身ぶりをした。

「ま、今宵は少し酒を過ごそうか」

「それがよろしい」

と言って兼続も盃を干し、石田の酌をうけた。石田は黍餅に手をのばしかけたが、その手をひっこめて、これはちと、ナニだとつぶやいた。

やっと酒の肴の貧しさに気づいたらしかった。石田は家臣を呼ぶと、いつもの漬け物を持って来い、と言った。

「ご葬儀は、二月になるそうな」

兼続が言うと、石田はうなずいた。眼のふちに少し赤味がさしている。

「二月の末じゃ。明日諸侯に対して、正式に太閤さまご他界を触れ、喪に服すると決まった」

秀吉死去の事実は、在朝鮮の将士には伏せられた。そうでなくともしめり勝ちな前線の士気に対する配慮と、敵方に探知される危険を考えた措置である。死去のことは言わずに、景勝をのぞく四人の大老名で、帰国を命じた。使者は美濃高松城主の徳永寿昌と、秀吉の直臣宮城豊盛の二人だった。

だが、その事実は日本の将士にも、敵側の朝鮮軍、明軍にも洩れた。名将李舜臣と明の水師都督陳璘がひきいる朝、明連合の水軍は、引き揚げにかかった順天城の小西行長、松浦鎮信ら一万三千の日本軍を海上で封鎖し、すでに昌善島、巨済島まで撤退していた島津義弘、立花統虎らが、五百隻の艦船を南海島にあつめて順天城の救援に乗り出すと、露梁津の海上に待ちうけて、これにもはげしく襲いかかって来たのである。さきの泗川の攻防戦で、わずか三千の兵で三万六千の敵を破った豪勇島津勢も、この海上の戦いでは惨たる敗北を喫した。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com